

第46回九州地区救護施設職員研究大会報告

支援を必要としている人を確実に受け止める施設としての期待に応えよう
～ともに生きる豊かな地域社会の実現を目指して～



【大会概要】

上記のテーマをもとに、令和5年7月6日（木）～7月7日（金）に佐賀市のホテルグランデはがくれにて、第46回九州地区救護施設職員研究大会が参集型で開催され、九救協各施設より90名の参加がありました。

第1日目は、開会式、中央情勢説明、意見発表（6施設）、意見交換会が行われました。全国救護施設協議会の大西豊美会長による中央情勢説明では、近畿ブロック職員研究大会にLIVE配信を行いました。第2日目は、分科会（2グループ）にてグループディスカッション、全体発表・まとめ、閉会式を行いました。

新型コロナウイルス感染症のため、4年ぶりの参集型での開催となり、2日間を通して活発な討議が行われ、実り多い大会となりました。

※詳細については、大会冊子をご参照ください。

- ・期日 令和5年7月6日（木）～7月7日（金）
- ・会場 ホテルグランデはがくれ（佐賀市）
- ・主催 九州地区救護施設協議会
- ・後援 佐賀県、佐賀市、佐賀県社会福祉協議会、全国救護施設協議会

7月6日(木)

13:30～14:00

【開会式】

開会の言葉 九州地区救護施設協議会 副会長 和田 徳行氏
主催者挨拶 九州地区救護施設協議会 副会長 上間 丈文氏
来賓挨拶 佐賀県 健康福祉部 部長 實松 尊徳 様
佐賀市 副市長 池田 一善 様

登壇者紹介

14:00～14:45

【中央情勢説明】

全国救護施設協議会 会長 大西 豊美 氏

15:00～16:45

【意見発表】

テーマ① 利用者主体の個別支援の質の向上に向けた取り組み

◎新たな就労支援システムの構築・・・仁風園 田吹 暢浩氏

◎高次脳機能障害の方の介護抵抗や清潔保持困難に対する園での取り組み・・・いしみね救護園 田端 健氏

テーマ② 利用者の人権を尊重した支援と虐待防止に向けた取り組み

◎気づきと向き合いニーズに変える・・・清風園 黒岩 美保氏

テーマ③ 地域におけるセーフティネット機能の強化に向けた取り組み

◎佐賀県内救護施設の連携による生活困窮者支援について・・・かんざき日の隈寮 中島 賢吾氏

◎地域におけるセーフティネット機能の強化に向けた取り組み・・・あいこう園 藤尾 照人氏

◎入所受入時における処遇困難事例について・・・溪泉寮 江良正平氏

7月7日(金)

9:00～10:50

【グループディスカッション】

グループ①：意見発表の内容についてグループ毎に情報の共有及び自施設へ置き換えて考えられる事、出来る事等について討議する。

グループ②：施設運営、人材確保・育成・定着に向けた取り組みについて情報の共有 ※施設長等管理監督者向けの内容

11:00～11:30

【全体発表】

グループディスカッションの内容を全体に報告

11:30～11:45

【全体まとめ・総評】

グループ①：調研委員長 高比良 宏輔氏

グループ②：大会実行委員長 大島 毅氏

11:45～12:00 【閉会式】

次期開催県挨拶 鹿児島県 ときわの丘 施設長 松永 幸二氏
閉会の言葉

第46回九州地区救護施設職員研究大会：グループディスカッション全体発表（記録）

テーマ① 『利用者主体の個別支援の質の向上に向けた取り組み』について

- ・介護抵抗、支援抵抗のある利用者について討議。利用者に安心して支援を受けてもらうと同時に職員も安心して支援を提供できることが目標といえる。信頼関係の積み重ね、日々のコミュニケーション、職員同士の情報共有が大切。
- ・多職種連携の重要性、情報共有をスムーズに行うことが課題。担当制度が多いなかで、担当利用者以外の目標も把握することが支援の質の向上に繋がる。
- ・個別支援に対する振り返り、面談を定期的に行う。職員間の情報共有できる雰囲気作りが重要である。ハード面の課題としてPCの確保、作業スペースの確保。LINEを利用して情報共有も有効的手段といえる。
- ・職員間の連携はもちろん、病院・関係機関との連携が不可欠といえる。救護施設の役割を職員が十分理解すること。また、ヒヤリ・ハット、事故報告書を積極的に活用し、処遇向上に努めることが重要といえる。

テーマ② 『利用者の人権を尊重した支援と虐待防止に向けた取り組み』について

- ・利用者から職員への暴言、暴力行為に対しての対応について、職員のストレスケアも大切にしなければならない。産業医面談、ストレスチェック等、その都度対応していく。
- ・職員によって人権に対する考え方がバラバラであるため、指針を統一するところから始めるべきでは。
- ・利用者の人権を守る取り組みとして、目安箱、意見箱を設置している施設が多い。その他の取り組みとして、苦情解決委員に定期的に来寮していただく施設もある。
- ・利用者の声を吸い上げる時間、また、その環境作りが大切である

テーマ③ 『地域におけるセーフティネット機能の強化に向けた取り組み』について

- ・生活困窮者支援事業を始めるにあたり、対応職員の人材確保が課題。ハード面の整備について、新たに整備するのか既存を使うのか等、検討事項が多い。
- ・各県、生活困窮者支援事業の充実度は様々であり、行政との連携が不足している施設も多数ある。今後、行政や地域との連携をどう構築していくかが課題。
- ・行政機関への働きかけを促進することで、困窮者の情報共有に繋がる。
- ・救護施設と地域住民との交流を積極的に行うことで、地域のニーズを把握するきっかけに

なり、地域の方にも施設内情を知っていただき、施設の見える化に繋げることができる。
・県内の救護施設同士の連携強化・情報共有が今後更に重要になってくる。

第 46 回九州地区救護施設職員研究大会：全体まとめ・総評（記録）

グループ①：調研委員長 高比良 宏輔氏

テーマ①～③について、ワークシートをもとに討議を行った。

今回の研究大会を実施するにあたり、久しぶりの参集型での開催であり、職員同士の交流を大切にしたいという思いから、グループディスカッションを重要視した大会となった。

今回の研修での意見発表、各施設の取り組みをぜひ自分の施設へ取り入れて欲しい。取り組みが難しい場合は、なぜ自施設ができないのか、事例や課題を見つけて欲しい。活発な議論が交わされ、多数の意見が出て嬉しく感じた。

また、救護施設先駆的実践シェアの手引をぜひ見ていただき、活用していただきたい。各施設の取り組みや情報が細かく開示されていて参考になる。

救護施設にしかできない活動、利用者・職員・地域のためにできることを一体となって行って欲しい。

グループ②：大会実行委員長 大島 毅氏

施設運営、人材確保、育成・定着について討議を行った。救護施設は障害・老人等の他種別に比べ施設数は少ない。しかしながら、利用者の課題が幅広いだけでなく、地域性も強く、支援の内容も専門性が求められるケースが多い。このような大会のなかで、他施設の運営状況や課題を情報共有できることは、非常に有効手段であると感じた。今後の施設運営に活かしていきたい。